

別記様式（第5条関係）

会 議 録

会議の名称	令和6年度 第5回行政評価委員会		
開催日時	令和6年10月2日(水) 午後7時00分から 午後9時00分まで		
開催場所	市役所本館2階大会議室		
委員名	(1) 出席委員 加留部貴行、橋内京子、木本圭子、芹野千佳子、中川孝晃、山下永子、近藤春生 (2) 欠席委員 なし		
所管課職員職氏名	事務局 経営企画部長 花田 積 経営企画部経営戦略課長 向井泰博 経営企画部経営戦略課経営戦略係長 山本素子 経営企画部経営戦略課経営戦略係 首藤春風 担当課 経済産業部長 宮原栄介 経済産業部観光振興課長 波多野哲平		
会議	議 題 (内 容)	・まちづくり基本構想の施策に関する評価① 7-1. 国内外の人が何度も訪れたくなる魅力を磨く	
	公開・非公開の別	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	
	非公開の理由		
	傍聴者の数	4 名	
	資料の名称	・資料 1-1 施策管理シート・事務事業評価（7-1）	
会議録の作成方針		☐ 録音テープを使用した全文記録	
		☒ 録音テープを使用した要点記録	
		☐ 要点記録	
		記録内容の確認方法	
その他の必要事項			

審議内容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）

1. 会長あいさつ

第4回会議において、今年度取り扱う施策について事務局が担当課と調整をするということになった。進捗の報告を事務局よりしていただきたい。

事務局）

候補として挙がっていた1-1「子どもの権利を守り、多様な子どもの居場所や主体的な参加の機会を促進する」について担当課と調整を行い、以下の理由で1-1を現時点で取り扱うことは難しいと判断した。

- ・本委員会は、前年度までの取り組みについて評価をする場であるが、施策1-1については新設小学校建設が含まれており、現在進行している内容に触れずに進めることは難しい。

- ・2時間では収まらないことが懸念される。

会長）

現時点で取り扱うことは難しいとのことであるため、今後機会があれば取り扱うということにする。また、それに伴い今年度は三つ目の候補であった4-2「暮らしやすさを実感できる生活基盤を整備する」を取り扱うこととする。

宜しいか。

委員全員）

異議なし。

2. まちづくり基本構想の施策に関する評価①

【前半】

担当課）

令和2年3月に策定した第2次福津市観光基本計画の基本方針は、基本構想の基本方針（＝施策）と同様である。そのため、施策管理シートの「施策の目指す姿」については観光基本計画の各基本方針の内容を記載している。

加えて観光基本計画では基本方針の具体的な施策として、①地場産食材を使った福津らしい食の開発・普及、②福津の目玉となる特産品の発掘・磨き上げ、③自然環境資源や歴史・文化資源の魅力発掘・磨き上げ、④自然環境、歴史・文化、産業等の資源を生かした体験、交流型観光の推進、⑤異分野との連携・組み合わせ等による新たな観光資源の創出の5つを記載している。また、連関する分野別計画の一つである第2次福津市都市計画マスタープランにおいては、観光施策について、①津屋崎地区を地域拠点として、観光資源を生かした活性化を目指すこと、②観光交流スポットや観光交流ゾーンの強化を図るとともに、他の観光資源と連携することで交流人口を呼び込み、経済活動の活性化を図ること、③世界文化遺産や津屋崎千軒などの歴史的景観の維持、形成を図ることが求められている。

施策の目標としては、「福津市に訪問して満足した人の割合」、「福津市への訪問リピーター率」、「新原・奴山古墳群への来訪者数」を設定している。満足度については来訪者へのアンケート調査から、訪問リピーター率については福津市への訪問回数の調査から算出している。基準値はどちらも平成30年に実施した観光地点パラメーター調査、実績値については観光基本計画の中間見直しの際に行った調査の結果、DMOが実施した調査よりそれぞれ

算出している。新原・奴山古墳群への来訪者数については、展望所に設置しているカウンターで計測している。

会長)

ここまでの内容について、各委員から質疑、ご意見等をいただきたい。

委員)

施策の目標や市民意識調査の結果が低下傾向にあるが、要因と対策を教えてください。

また、**KPI**が下がっているにもかかわらず総合評価が「**B**」評価となっている理由は何か。

担当課)

基準値を計測した平成 30 年度から来訪者の属性や状況が変化しているように感じている。

リピーター率について、低下しているということは一度来訪した人が再び来訪することが少なくなっている、または初めて来訪する観光客が増加していることが要因として考えられる。観光入込客数は確実に増加しており、インバウンドを含めて様々な属性の方が来訪している。そのため、後者が要因ではないかと考える。

満足度については低下しているものの高水準を維持しており、観光基本計画の最終目標値（86.6%）を超えている。したがって総合評価は「**B**」としている。

委員)

リピーター率について、今後は 2025 年の目標に向けて上げていく方針なのか、新規訪問者を増やす方針なのか、観光入込客数の明細が分かなければ何とも言えない。

委員)

ターゲット（年代、国籍など）毎の目標値や施策はあるか。

担当課)

DMOと協議の上、観光客の現状や保有する観光資源を鑑みてターゲットを設定している。

まず、海沿いのカフェや **SNS** で共有できるような写真スポットがあることから、40 代の女性小グループをターゲットとして設定し、イベントやプロモーションを行っている。また、アクティブシニア（60 代～70 代前半の子育てが終了した世代）の夫婦をターゲットとしたバスツアーやプロモーションを行っている。

海外観光客については東南アジアの富裕層をターゲットとして設定しており、寿司づくりなどの体験ツアーや **SNS** で発信できる景観のプロモーションなどを行っている。

それぞれに対する目標値等は設定していない。

委員)

そのようなターゲットの設定は **DMO** 設立以降に行ったのか。

担当課)

ターゲットを設定すべきという議論は元々行っていたと思うが、明確に設定したのは **DMO** を設立した令和 4 年度以降である。

委員)

観光基本計画における目標値について、満足度は 86.6%が最終目標値とのことだが、リピーター率や古墳群への来訪者数についても最終目標値を設定しているのか。

担当課)

リピーター率は 69.4%、古墳群は 20,000 人と設定している。

委員)

古墳群への訪問について、20,000 人を目標としているところに 30,000 人が来訪するとガイドの不足といった問題が起こることが考えられるが、どのような対応を取っているのか。

担当課)

トイレや駐車場のハード面の設備やプロモーション等は文化財課が担当しており、観光振興課ではボランティアガイドの配置やタクシーチケットの配布を行っている。

現在行っている対応として、仮設トイレの設置などを行っている。また、日陰の不足などの課題が上がっているため、今後文化財課と連携して対処していきたいと考えている。

委員)

古墳群の良さは古墳の間の小道をボランティアガイドと一緒にゆっくりと歩くことであると思う。しかし人が集中し目が届かないと、入ってはいけないところに入るといった保存面における問題が懸念される。

人が多く訪れることを良しとするだけでなく、ガイド料を取るといったことにより、質を向上させることも重要ではないか。質の高いものや労働力のかかるものを無料で提供する時代は終わっている。ボランティアガイドについてはプロフェッショナルとして養成し、対価を支払ったほうが良いのではないか。

委員)

自分の身近な市民の意見として、福津市は住むにはとてもいいまちであるが、観光については中途半端という声をよく耳にする。力を入れて施策を行っていることはよくわかるが、光の道やかがみの海などは天候や季節に左右されるなど、常時打ち出せるような目玉資源があまりないように感じる。また、宿泊施設や温泉がないため途中で立ち寄っても通過してしまう。一方でメディア露出を良くしており、プロモーションに注力されていることがよくわかる。また利便性が高い。

自分は山口市出身であるが、山口市は現在注目されている市である。プロモーションや利便性といった点では弱いが、温泉街があるなど受け皿はある。福津は真逆であり観光客が激増した場合に受け入れる土台が整っていないため、目玉資源を絞り込んで対応した方が良いのではないかと思います。

また、パン屋や昔ながらのお店が多い、勝浦の人形浄瑠璃などの特徴があるため、視点を変えて目玉資源を設定できると良い。福津市は「住みたいまち」といわれているが、観光を振興するためには視点を変えなくてはならない。

委員)

満足度について、「何に満足したか」を知ることのできる調査項目はあるのか。

担当課)

満足度に関する調査項目については観光施設に対して、「大変良い」「良い」「悪い」といった評価をしていただくものであり、この調査項目で何に満足しているのかを割り出すことは出来ない。そのほかにアンケート全体を通した自由記述項目があるため、その中からピックアップすることは可能である。

委員)

近年観光公害が問題となっているが、福津市では観光地と居住地のゾーニングや住民への啓発は行っているのか。住民へ周知しなければ反発が起きてしまう。

担当課)

第2次都市計画マスタープランにおいて、地域拠点となっている津屋崎地区は観光による振興を図っている。その中で観光交流スポットと観光交流ゾーンを設定している。

特に津屋崎千軒は居住地でもある一方で観光交流スポットとしてゾーニングされており、観光地でもある。

委員)

住民に対して説明等は行っているのか。

担当課)

行っていない。

委員)

した方がよいと思う。

住みやすいまちほど観光に対して嫌悪感があるため、ある程度コントロールする必要がある。

委員)

実際に海沿いの道などは週末渋滞となっており、住民は大変である。

委員)

カフェなどを資源とするならば、常に新しいものを生み出さなければならない。それを是とするのかも検討する必要がある。

会長)

元々福津市は非日常的な観光の町ではなく、日常の暮らしやすさに重点をおいた町であったように思う。日常の暮らしやすさを前提に考えていかなければ定住人口が転出してしまうため、日常を崩さないようにバランスをとって観光を打ち出す必要がある。指標として訪問される側である住民の満足度の視点も必要ではないか。

委員)

子供が増えている中で、古墳については市内の教育や修学旅行の場として活用する方法もある。

委員)

福津市内の人が観光施設に行きお金を落とすことも「観光」に入るのか。

担当課)

基本的には市外からの訪問客がお金を落とすことを指す。

委員)

市民が観光施設等を利用した場合も「観光施設にお金を落とす」という意味では同じであるように思う。「住みやすいまち」に着目するのであれば、「市民が楽しむ観光」という視点があっても良いのではないか。例えば郷育カレッジでは各郷づくり地区にある、観光地よりもディープな場所を周るふくつ散歩という講座がある。

会長)

市民の憩いの場と外から観光客を呼ぶ場の性格付けは必要である。

【後半】

担当課)

成果について、市の附属機関である観光活性化協議会で観光基本計画の審議、観光施策の評価、審査等を行っており、令和5年度においては観光情報の共有や発信の一元化について審議を行った。

令和4年度にDMOが設立され、令和5年度はJR旅客6社主催の福岡・大分ディスティネーションキャンペーンに向けたコンテンツの開発や発信等を主体となって行った。また、宮地嶽神社の参道に観光案内所を設置し、門前町全体の活性化や市内周遊のための情報発信を行っている。

夕陽館については令和5年度に福社会館条例を廃止し、温浴施設、観光に資する施設として事業者の公募を行った。現在契約に向けた手続きを行っている。

課題としては、来訪者の多くが福岡市や北九州市等の近隣自治体から自家用車での来訪であり、宮地嶽神社や海に立ち寄った後、すぐに移動してしまうことである。このような来訪者に対して周遊の促進や消費の促進を図りたい。その結果滞在時間が増え、より福津市の魅力を知り関係人口となってもらえることが出来ると考えている。そのためにコンテンツの掘り起こしに注力する。

委員)

来訪者に占める県外からの割合及び宿泊の割合が低く、観光消費額が上がらないという課題に対する解決策が交流人口や関係人口を増やし滞在時間を増大させることとあるが、その因果関係がわかりにくいので具体的に説明いただきたい。また、考えられる対応策として具体的に何をするのか教えていただきたい。

基本構想が策定されたころは、自然を守りながら人を呼び込むということで観光なども推し進められたようであるが、現在は状況が変わっており、方針を見直す必要がある。市民の幸福を追求することで、市民が外で落としているお金を回収するという視点もあるのではないか。

また、産業を振興し市外への流出を防ぐためには、商工会等とも連携する必要があるし、そのような役割分担や理念を共有する必要がある。

担当課)

旅行者が多様化していると感じている。以前は海水浴が人気であり海の家や別荘がにぎわっていたが、現在は海の景観を楽しみ、カフェ等に立ち寄る人が多い。

実際福津市への来訪者としては県内（車で一時間以内）の方が 76%、車による来訪が 75.3%である。しかし、1 時間以内の滞在が 50%、宮地嶽神社への来訪が 54.6%となっており、偏った場所に来訪し短時間の滞在をされる方が多く、消費が起きないのが現状である。そのため、食事や体験等につなげて滞在時間を延ばすことやリピートして来訪してもらうことが必要ではないかと考えている。前述したターゲットからは高付加価値な食事が求められているため、鯛茶づけの食フェアを実施している。

委員)

他の自治体では、まずリピートして交流人口となってもらい、その後さまざまな活動に参加する関係人口となってもらい、最終的に定住してもらうことを目標としているが、福津市では定住人口を目標としてはいけない。関係人口を大切にするためには、イベントやワークショップが大切である。例えば、郷育カレッジなどは市民限定の講座であるが、市外の方も参加できる講座であれば、講座に参加するために市外から来訪し、食事などの消費も発生する。そのような場合も観光客として数えられる。

担当課)

体験型のコンテンツを磨くということか。

委員)

いわゆる「観光」からは距離を置き、市民の生活に根差した文化や学びといった福津ならではの良さを体験してもらうような方向性にシフトした方が良いということである。

また、宿泊施設は人手不足の現状で新たにつくることは難しい。

委員)

郷育カレッジで公開講座を行っていたこともあったが、予算や人員配置の兼ね合いで実施が難しくなった。予算や人員配置次第では福津市の観光コンテンツの一つとすることも可能であると思う。

委員)

郷育カレッジを観光コンテンツとすることや古墳群の修学旅行等の学習の場として活用することなどは質が重要であり、必ずしも儲けにはつながらないと思う。一方で観光協会や DMO といった組織で観光を考える際には、「観光で儲ける」ことを考える必要があると思う。しかし、観光で儲けることができるのか疑問である。

委員)

福津市の場合、一般的な観光施策ではどうしても中途半端になってしまうように感じる。「市民に着目した観光プラン」のように切り口を変えた売り出し方をした方が、着目されるのではないか。

委員)

地域行事など市民の暮らしや生活の質 (Quality of life) が福津市の魅力であり、観光についてもこれをアピールするという方法が持続的であるように思う。現在 DMO が行っているように、タイから観光客を呼び込むといった方法では持続可能でない。

暮らしの旅のような企画は手がかかるかもしれないが、その細やかさこそが重要であるように思う。

委員)

国民宿舎、大峰山キャンプ場等宿泊施設はかつて多くあったが、現在はなくなってしまった。新たにつくることは難しいため、視点を変える必要があるのではないか。

委員)

民泊施設等は現在も存在するがあまり知られていない。そのような場所で市民の生活を体験できるようなコンテンツを売り出せると良い。それがくらしの旅であった。

委員)

これほど子供が多い中で、観光客や車が増えると危険である。まずは、地域の子供や新たな転入者が地域を知る機会を設けた方が良いのではないか。

会長)

人口が減っている時期か増えている時期か、住民と来訪者のバランス、観光の考え方などが変化している中で、様々な考え方が出てくると思う。福岡市が打ち出したビジターズインダストリーでは、買い物客や講座の受講生、冠婚葬祭など様々な属性の来訪者を対象としていた。市内でも知られていないことを掘り起こすことで、新たな「日常・暮らし」のコンテンツとなり、域外への経済流出防止につながるのではないか。また、滞在時間と消費について課題が出ていたが、むしろ一回当たりの滞在時間・消費は少なくてもいいので何度も来訪してもらうといった方向性もあるのではないか。

これらを踏まえると、従来の考え方に流されない、「福津市にとっての観光、交流人口、関係人口、インバウンドとは何か」を考え、福津市の規模に合わせた観光や事業を検討する必要がある。現在人口が増えている中では日常と非日常のバランスをとるよう意識し、期間を切り分けて方針を立てた方が良いのではないか。

委員)

福岡中で未来会議を行うなど、福津市は教育に力を入れている。子供の視点や他部署、他機関と連携して視野を広げると、面白い考えが生まれるのではないか。未来共創センターを活用することもできる。また、地域資源については同じ市内でも他地域の人は知らないといったこともあるため、域内での交流も重要である。

委員)

公園は観光資源としてプロモーションしていないのか。

担当課)

していない。

委員)

現在、公園は価値のある重要な資源として注目されている。

会長)

福岡市の観光イメージは夜に強いが朝や昼に弱い。福津市は宿泊施設がなく夜には弱い、朝や昼に強いといった方向づけも良いのではないか。

担当課より感想をお聞きしたい。

担当課)

自分も「観光とは何か」と常に考えている。一方で様々な物事が観光につながるように感じており、皆様の話を参考にさせていただきたい。今後も広く視野を持ち、耳を傾けるよう心掛ける。

担当課)

本日頂いたご意見を参考に改めて考えていきたい。

また、農水産業や商工といった産業との連関の中で、観光は人を呼ぶ起爆剤となると感じている。「福津市に魅力を感じて来訪してもらい、そこで興味を持ち関係人口なってもらう」という流れをつくれるよう取り組みたい。
大変勉強になった。